

752-140



1200501594757

2

140

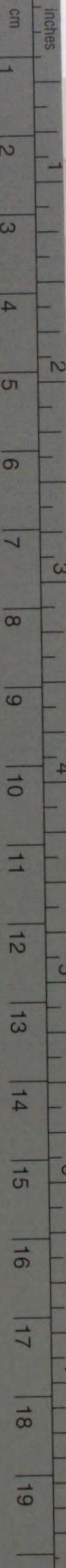
京都帝国大学 満蒙文化
研究会パンフレット 第一冊
古代満洲の民族と文化

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



75
14

京城帝國大學滿蒙文化研究會 Pamphlet 第一冊

古代滿洲の民族と文化

京城帝國大學滿蒙文化研究會



古代満洲の民族と文化

鳥山喜一



發行所寄贈本



遼陵出土契丹文字哀冊

此の刻石は熱河省林西縣（今の興安西分省）の東北二百支那里餘のワリン・マ
ンハといふ山中にある遼の陵墓から出土し、湯玉麟によつてはるく奉天に運ば
れたのが、滿洲事變後、其の息佐榮の邸内で發見されたものである。同邸内では
此の種の契丹文哀冊が二組、漢文の哀冊が五組、漢文の篆蓋のみが一枚、其の他
があつた。茲に示したのは二組の契丹文哀冊中の一組で、上が篆蓋、下が哀冊文。
篆蓋の字は哀冊文の初行の文字を分解して之れを裝飾的（漢字でいへば篆文風の
表現）にしてゐる。此の分解の工合で、此の文字が綴字であるのではないかとい
ふ暗示を與へてゐる。碑石は白大理石。方約一・三メートル。

或る研究者は漢文の方の哀冊と比較して、此の契丹文を道宗の哀冊、他の一組
を其の後宣懿皇后のものではないかと推定してゐる。まだ解讀は出来ないが、記
傳のみで、殆ど全く知られてゐなかつたといつていゝ契丹文字の實物が、かくも
多量に現はれたことは、學界の慶事とされてゐる。

遼陵出土契丹文字哀冊

此の刻石は熱河省林西縣（今の興安西分省）の東北二百支那里餘のワリン・マ
ンハといふ山中にある遼の陵墓から出土し、湯玉麟によつてはるく奉天に運ば
れたのが、滿洲事變後、其の息佐榮の邸内で發見されたものである。同邸内では
此の種の契丹文哀冊が二組、漢文の哀冊が五組、漢文の篆蓋のみが一枚、其の他
があつた。茲に示したのは二組の契丹文哀冊中の一組で、上が篆蓋、下が哀冊文。
篆蓋の字は哀冊文の初行の文字を分解して之れを裝飾的（漢字でいへば篆文風の
表現）にしてゐる。此の分解の工合で、此の文字が綴字であるのではないかとい
ふ暗示を與へてゐる。碑石は白大理石。方約一・三メートル。

或る研究者は漢文の方の哀冊と比較して、此の契丹文を道宗の哀冊、他の一組
を其の後宣懿皇后のものではないかと推定してゐる。まだ解讀は出来ないが、記
傳のみで、殆ど全く知られてゐなかつたといつていゝ契丹文字の實物が、かくも
多量に現はれたことは、學界の慶事とされてゐる。

此の碑は朝鮮咸鏡北道慶源郡東原面で發見され、今は京城の朝鮮總督府博物館に所藏されてゐる。沙岩の角石で四面に女眞小字の刻字を有してゐる。惜いことに上部を缺損してゐる。此の碑文の解讀は未だ發表されて居ない。現存の部分は高さ約一・九メートル、幅は〇・四三メートル乃至〇・五七メートル。



此の碑は朝鮮咸鏡北道慶源郡東原面で發見され、今は京城の朝鮮總督府博物館に所藏されてゐる。沙岩の角石で四面に女眞小字の刻字を有してゐる。惜いことに上部を缺損してゐる。此の碑文の解讀は未だ發表されて居ない。現存の部分は高さ約一・九メートル、幅は〇・四三メートル乃至〇・五七メートル。

四三ノ一ノ五式至〇・庄ナキ一ノ四ノ
 眞容の語合ハ高キ降一・武ノ一ノ四ノ・語合〇・
 〇・此ノ轉文ノ釋讀ハ未ダ發見セズト云ハレ
 〇・書シテハ〇・當レリト云フ語ヲ考證シテ
 下ル。若キハ其下ヲ四面ニ支取小字ノ隙ヲ
 以テ今東京城ノ原道縣骨神社前ノ池邊ニ
 此ノ物ヲ得テ發見シ並ニ國書院東照廟ヲ發見シ



女眞文宇碑文

752
140

古代満洲の民族と文化

東アジアの古い事蹟を、今日我々が知るには、之れと直接間接の關係交渉をもつた漢民族の記録に據るより他には、まづ方法がありません。それで漢民族の遺してある文獻から、拾ひ集められた事實を骨子として、それに種々の解釋を下して、史的眞實を掘み出すことゝします。

まづ題目の一部をなす満洲といふ言葉の限定ですが、一體この名稱の起源原義については、まだ定説はないのです。清朝の太祖實錄などには、建國の初に、國號を満洲といったといひますが、それは國初には勿論後にも確證はなく、康熙年間の實錄改修の際に、史臣が單に記録上で假構したものと思はれます。また意義については、西藏からの國書に、太宗を曼殊室利皇帝と尊稱したので、此の曼殊（即ち文殊）か

ら滿殊、滿洲となつたといふ説もあります。然し實は彼等の間に、既に文殊の信仰があり、太祖も此の尊稱(滿住)を受けてゐた事實もあるので、之れが轉じて、部族名となつたとする、自發説の方が妥當でありませう。恩師市村博士の「清朝國號考」(東洋協會學術調査報告所收)には、各種の考説の紹介と、博士の考説が掲げられてゐますから、特志の人々は、御覽になるようにとお勧めして置きます。

此の滿洲といふ名稱に含まれる地域は、清の極盛期には東三省も、また今のロシア領沿海州の如きも、含まれたわけですが、其の後ロシアへの割讓等のため、清末の滿洲は狭い地域になりました。尤も茲に滿洲といふのは、喧しい制約は離れて、今の滿洲國の領土、北部朝鮮——朝鮮ことに北部朝鮮は、歴史的に見て滿洲とは全く不可離のもので、——ロシア領沿海州等を、一括した地域の意味に致します。さうしてそこに消長した民族や、其の文化の概觀をして見ようと思ふのであります。

二

此の方面の民族の事が、支那のいつ頃の記録に見え始めるかといへば、大體、春秋

の終り、戰國時代のもので、書經とか、春秋左氏傳とか、國語とかいふ書物に見られます。詳しくいへば、これら書物の製作年代、少くとも今日の形の出來上りには、問題も疑問もあるでせうが、まづ大ざつばにいつて、其の年代はそんな風に考へられませう。さうしてそれらの書物によれば、中原の北、東北方の民族に、肅慎、貊などいふものゝあつたことが知られますし、またそれが漢民族の天子の化を慕つて來貢したといふ事の、古い記事も傳へられてゐます。なほ前漢代に出來て、後世正史の範を垂れた司馬遷の史記の五帝本紀には、帝舜の記事の中に、禹が帝舜の命によつて大洪水を治め、諸夷來貢の路を開いたとき、北方の夷族に山戎、發、息慎の名を擧げてゐます。發は貊、息慎は肅慎の異譯です。

そこで古く名の知られたのは、此の貊や肅慎ですが、殊に後者は其の楛矢石弩の貢獻を傳へられて、有名になつてゐます。いま後世の支那の記録から推測しますと、清朝の建設者(滿洲族)は女真族の一派です。其の女真族は、隋唐の時代には、靺鞨と呼ばれたものであり、それはその前の南北朝時代には、勿吉の名で知られ、遼つて漢代には挹婁、更に周代には肅慎の名で傳へられたものと同種といふ事になりま

四
す。清朝時代の滿洲語は女真語と全く同系であり、之れは兩者の民族的關係を肯定させます。それで記録の文面を一方に於いて類推して行くと、肅慎からすつと滿洲族まで、一列の系脈が引かれます。これはまた言語の比較——僅かに残されたものではありますが——と相俟つて、人種的には Tungus 種といふ事が出來ます。前にいつた貂種、これは時に穢貂と熟して呼ばれることもあり、最初には最も注意すべきものです。尤もこれは多少蒙古系の混入があつて、純粹な Tungus ではなかつたかとも想はれますが——。それからまた主として、熱河北部方面を中心とした烏丸鮮卑の名が漢代に見え、その後裔で最も顯はれたのが唐・宋にかけての契丹族です。これは蒙古系に屬してゐるやうです。後漢には夫餘族の名も顯はれます。さういつた種族も、此の滿洲での活動に、一役を受け持ったものでありました。

三

史記の五帝本紀の帝舜の記事中に、肅慎や貂が、其の名を顯はしてゐるといふこ

とは、何も實際さうした時代——五帝などは神話的なものです——の史實として、之れを認める意味で申したのではありません。それは次に云ふ傳説と同様に、天子の徳に附會された物語なのであります。

なほ史記の周本紀には、成王の時傳説的には約三千年前の事件として、成王すでに東夷を伐つ。肅慎來り賀す。王、賜あり。榮伯、息慎に賄ふの命を作

るといふ記事があります。書經にはもと「賄肅慎之命」といふものがあつたこと、其の序が存してゐること、で知られます。さういふことが周公旦が攝政として、太平の治を致した成王の時の話に残されてゐます。

それから逸周書といふ書物(これは問題もある書ですが、書經の周書の逸文を集めたもの)には、王會解といふ篇があつて、やはり周の成王のとき、諸侯・四夷が王廷に會した折の席次等を記した中に、肅慎を稷慎といふ字で記し、其の民族に塵といふ大鹿のあつたことも、併せ録してゐます。

成王の時の肅慎來貢といふ傳説は、後世まで深く印象づけられて、例へば前漢書

の武帝本紀には帝の元光元年(西紀前一三四年)の詔勅の中にも

周の成康のとき、刑錯きて用るず。徳禽獸に及び、教四海に通ず。海外、肅、脊、北、發、渠、搜、氏、羌、徠、服、す

と、慎は古字脊で寫されて肅慎も、北發即ち貂も、慕化來朝といふことで記されてゐます。因みに渠搜氏羌は西方の外民族です。

その後の問題としては、春秋左氏傳、魯の昭公の九年(周の景王十二年、西紀前五三年)の條には、景王が晋を責め、自國の四圍を語つて

肅慎、燕、亳は吾が北土なり。

といつたことも見えます。亳は貂でせう。それから國語の魯語の中に、陳の國の公庭に落ちた隼に關して、孔子の博識を傳へた物語りがありますが、それは楛矢石矟で射られたまゝ、落ちてゐたので、孔子はそれを肅慎氏の遠土から來たものだと、いつたといふ話なのです。楛矢石矟は、肅慎氏の代表的土俗品とされてゐます。

以上の如き記事は、それを傳へる書物が、漢初の整齊を経たらうものもあります。が、それにしても當時の思想なり知識なりを、反映してゐるには相違ありません。

また一方中國の聖天子の出現と、遠夷の朝貢といふ聯關思想は、漢民族の對外思想の一型式一公式であります。けれどもかうした記事の生れ出て來るには、たとひそれが作爲で、史的事實でなかつたとしても、其の資料としての知識は、どういふ處にあつたか。これは歴史を研究する者にとつては、大切なことと思はれます。そこでかうした資料なり知識は、肅慎その他との、直接の交渉があつた結果か、或は間接なものか、はた全く想像の所産であつたらうかといふことが、問題となります。

四

茲で私は東北アジアへの、漢民族の歴史的進出について、一應の考察をする必要があらうと思ひます。去る昭和三年、濱田博士等によつて試みられた、關東州貔子窩の考古學的踏査の結果から、濱田博士は

さて人種上の問題は如何に決定せらるゝにせよ、此の遺跡の示す文化は、支那周末漢初の文化的色彩が頗る顯著に存在してゐるのである。即ち有孔石斧の如き所謂支那式石器や、鬲、甗の如き支那特有の形式の土器や、支那漢式の青銅器具

や、又た周末漢初の錢貨の存在は、之を證するものであつて、此等が單なる輸入品とは考へられず……皮相的の文化的影響の結果とは、見ることが出來ず、何うしても彼等の生活の根本に、喰入つた存在であつたことを、推測する外はないのである……實に漢民族は斯の如き、自己の植民、若くは自己の文化的植民地を、此の遼東半島の沿岸地方に、點々として所有して居つたので、此の碧流河畔の遺跡の如きも、畢竟其の一例に過ぎないのである。

と推論されたが、之れは此の問題に關して、示唆深い言葉であると考へます。

之れを記録に徴しますと、前にいつた左傳魯の昭公九年(周の景王十二年)に、景王が肅慎や貊と併せて、燕を其の北土といつたことや、史記貨殖傳には

夫れ燕もまた勃碣の間の一都會なり……北は烏桓、夫餘に隣り、穢貉、朝鮮、真蕃の利を結す。

とあることなどで、漢民族の進出の一面を察することが出來ませう。

それなら例へば燕人の如きが、直接に肅慎に交渉を有ち、其の結果が上來いつたやうな資料の提供となつたかといふに、必しもさうは斷じがたいやうであります。

といふのは前にいつたところにも、ちよい／＼顔を出した貊なるものが、私には注意されるからであります。

前述のやうに、史記五帝本紀の發が貊と推定され、左傳の亳が貊と想像されることは、暫く措くとして、詩經大雅、蕩之什、韓奕に

王、韓侯に其の追、其の貊を錫ひ、奄に北國を受けしめ、因りて以て其の伯とせり。

とある、追も貊も戎狄の國といふことですから、北方外夷の一つであつたことは知られます。史記匈奴傳には、貉といふものが見え、

趙襄子、句注を踰えて、并代を破り、以て胡貉に臨む。

とあります。説文解字には、貉も貊も莫白の切で同音。貉も貊も同種で北狄の一種と想はれますから、此の貉即ち貊が、戰國時代に、今の山西省北部、雁門關以北の地に、胡即ち匈奴と隣してゐたことが知られます。また前引、史記貨殖傳の記したやうに、東にも及んで、滿洲の東南部、朝鮮と連つて居たことも推せられます。なほ史記匈奴傳には

冒頓に至り、匈奴最も彊大。……東は穢貉、朝鮮に接す

ともあるので、漢初には、匈奴の勢力の伸展に壓されて、西の方の根據は失はれ、東に遷つて來たことが分ります。かうした頃に於ける、貂種の實際の活動は、前漢書高祖本紀に

北貂燕人來り、梟騎を致して漢を助く。

といふ記事に、其の一端が窺へませう。

以上の記事の中には、穢貂と連稱された用例もあり、また貉(貂)が單獨に、穢と伴はずに出て來ることもあり、或は漢書武帝紀の中には、葦君南閭(後漢書東夷傳には、葦君に寫し、すべて同書は穢を濊に作つてゐます)として、此の種族の名が、葦といふ字で譯された例もあります。文獻を通觀して見ますと、穢貂、穢貉と多くは連稱されてゐますが、これは必しも常に二つのものゝ意味ではなく、單稱で出て來る場合と、同様の概念で取扱つていゝやうです。たゞ貂の單名が早く出て、後に穢濊が附着しますし、また穢濊の單獨使用例も見られるのです。

さて此の貂は前に申したやうに、詩經にも見られますが、書經武成の篇に
華夏・蠻・貂、率俾せざる罔し。

とあり、論語衛靈公篇には

言忠信、行篤敬、なれば、蠻・貂の邦といへども行はれん。

とか、中庸第三十一章には

聲名、中國に洋溢し、施いて、蠻・貂に及ぶ。

とかいふ句も見え、華夏・中國に對する蠻・貂に對する貂として見られる所に、重大な意義があるやうに思はれます。前にもいつたやうに、貂は北夷の一つですが、かく南方の蠻と對して、北方の貂として、漢人の知り得た南北の夷族の、總代名となつたといふ點に注意を要します。

之れを一方に置いて、さて先の史記匈奴傳、貨殖傳等に見られる、貂(穢貂)の分布を考へますと、此の貂が中原の北方山西北部から遷つて、東北遼東方面に據り、やがては東北方を中心とすることゝなつた推移を知ることが出來ます。然もそれが常に北方の燕と、密接な關係に立つたことに氣がつかます。

思ふに先秦時代からの、燕の東北方への進出と、此の貂族との關係は、かなり密接なものがあつたのでせう。さうして其の直接交渉が、貂を北方の代表的な夷族

として知らしめた。此の知識が本となつて、次に肅慎に關する知識が生れたのではありますまいか。

一二

肅慎については、最初に指摘したやうに、それが中原聖天子の慕化の形式での來貢として傳へられます。此の點が大いに注意すべきところで、既に實際の接觸で、北方夷族としての貂に就いての知識を得た、先秦の漢民族は、之れを通して、肅慎についての或る傳聞を得たらうことは考へられます。此の傳聞は、南の諸蠻を越えて、更に南方の越裳氏が、聖天子を慕ひ九譯を重ねて來獻したといふ、周成を飾る傳説を作つたのに對して、北では肅慎氏の楛矢石矟の貢獻を傳へることゝなつたのではなからうか。かく推するのは肅慎に關する傳が、餘りに形式的であるからであります。

かうして生じた肅慎の來獻傳説は、前にいつた國語魯語の中の孔子の陳廷に於ける隼の話にしても、孔子の博識をいふと共に、先王の徳化讃頌の意念が寓せられてゐます。また晉時代の郭璞は、山海經の肅慎國の條に記される、其の國にある雄（或は雉とも書く）常といふ樹木に註して、

其の俗衣服なし。中國に聖帝の代り立つ者あらば、則ち此の木皮を生ず。衣るべきなり。

と記してゐます。これも今申した思想からの所産——中原の聖天子の徳化讃頌——であることは明といへませう。

前漢代にも肅慎についての記事は、なほ有りますが、それはすべて楛矢石矟の貢獻等を形式的に或は文學的に傳へてゐるもので、事實の上の交渉といふ點になりますと、その形は捕捉しがたくなります。

なぜさうなつてゐるのであらうかと申せば、原因は其の知識が間接的で、貂等によつて得られ、且つそれが一種の形式主義で作りに上げられたといふ所に存するものでせう。私は肅慎は漢民族とは直接交渉をもたなかつたものと推察します。けれども其の實體をも否定するものではありません。實際、貂の更に北に遠くゐたもので、貂自身も或は之れを傳聞に於いて、漢民族に致したものではなかつたらうか。それは慕化朝獻の如き形式に、一層の神祕さを増させるものとして、効果があつたらうと想はれます。

さて此の貂—穢貂—は、先秦から漢代に於ける間に、東への移動を示したが、それは前漢末には遼東に於いて、高句麗建設の主要役者となつたと想はれます。高句麗は Tungus 系の人種が建てた最初の國で、興味あるものですが、主に朝鮮に關係しますから、今は省略することに致します。後漢書の高麗傳の中に「句麗一名は貂耳」といふ記事もあり、已に恩師白鳥博士が滿洲歴史地理第一卷で指摘されたやうに、「國史に高句麗を貂とも書いて、之を Koma と訓ませたる例」のあるのに見ても、貂と高句麗との關係の密接さを知ることが出来ませう。

此の穢貂は後漢・三國時代には、主として濊の名で傳へられ、朝鮮半島の東岸に遷つてゐたことが、三國志等で知られます。當時半島には類族と想はれる北沃沮・東沃沮が咸鏡道に居たので、濊は大體江原道に據り、咸南の南部にも分布したやうです。後に渤海國が興り、半島北部を領有すると、一時、これらのものは、大部分その中に包まれ、更に時代が降るまゝに半島民の中に溶け込んでしまひます。

さて私は肅慎については、其の實在は認めるが、漢民族との直接の交渉は疑問とし、それを漢人の一種の理想主義からの、聖天子への慕化來獻の一傀儡として考定しました。然し後漢書や三國志の魏志には、此の肅慎の後として、當時北部滿洲に挹婁族の存在したことを傳へてゐます。挹婁に就いての知識は、濊貂の北に肅慎があるといふ傳へを、漢民族の一般的な地理的知識の發達によつて、開展した結果もありませうが、魏の將軍の高句麗征伐から導かれた、北沃沮(咸鏡北道)の經略によつて、それと地つゞきの挹婁の事情を知ることが得たといふ、實地踏査に重要な根據があると思はれますから、肅慎の場合とは大分違ひがあります。尤も挹婁が肅慎と、其の内包外延を全く同一にしてゐたとはいへますまいが、特に三國志によつて察しますと、挹婁の分布は、吉林省東部殊に沿海州方面に中心があつたことが窺はれます。さうしてそれが漢族に、曾て遠く北方に據つた夷族として、描かれてゐた、肅慎を想起させたので、肅慎挹婁の一致説も傳へられる事となつたのでせう。

此の挹婁といふ名稱は、どういふ意義のものか。曾て白鳥博士は、沿海州の Tungus に、支那人が鄂倫春 (Orochun) の名で呼び、アイヌ人が Oroko といひ、黒龍江下流域の Goldi 族が Oroci と呼ぶ部族のあることに注意されて、此の挹婁 (Tiu) はそれらと縁あるものではなからうかとの考説を提供されたことがありました。

此の Oronchun, Oroko, Oroci などいふ名稱は、恐らく滿洲語で角の義を有する oro, oron 等と縁ある語で、oronbuku 即ち角鹿・麋などと同じ意味に用ゐられること、清文彙書や増訂清文鑑などで知ることが出来ます。もしさうとすれば、之れは彼等が トナカイ使用の習俗から得た名稱でせう。なほ前に逸周書が、肅慎については、楛矢石矟の使用の他に、麋といふ鹿のことを傳へてゐたこと、想ひ合はせて、これがいはゆる Reindeer Tungus の一派ではなかつたらうかと考へさせられます。

私はこれまで時々 Tungus といふ言葉を用ゐましたが、それは何を意味するかといひますと、Shirokogoroff 氏はその大著 Social Organization of Northern Tungus で、Yakut 人が Yakutsk 州内で、北方ツングース語を話す住民に附けた名で、*togus* = *tongus* といふ語に起り、トルコ語系に屬する言葉で、豚を意味するものである。これがロシア人

に受け容れられ、遂に學術語になつたのであるといつて居ます。西洋人の中には、音の類似から漢史の東胡を、此の Tungus に擬する學者もありますが、それは大きい誤りであります。

なほ Shirokogoroff 氏は前記の大著に於いて、此の Tungus の移動について、もと支那本部の北部に占據したが、西暦前三千年代に、今の滿洲への移動を始め、そこに據つて居た Paleasiatics の中に喰ひ入つて、定住することゝなつたものと解釋し、其の推定移動圖をも作成してゐます。此の假説の判定はなかく、困難であり、又 Tungus の滿洲占據は、南からの移動かどうかとも問題です。随分古い歴史をもつものであるのは確でせうが、其の純粹の Tungus と思はれるものは、却て絶えず北から南へと、代る代る現はれて來たことが、文獻的にはいへるやうです。

肅慎挹婁については、その想像される トナカイ使用の習俗の他に、楛矢石矟の狩獵器具のことが傳へられてゐることは、前にいつた所で明ですが、挹婁については、更に其の生活状態等が、かなり詳しく報告されてゐます。五穀も多少作られて、農耕への踏出しが認められ、牛馬は財産であり、重要な勞働力でありました。其の住

居は立穴で、其の深淺が、富貴と貧賤とを、反映したといふことです。其の男女關係では、婦は貞にして女は淫なり」といつてゐることは、既婚婦人の貞節と、未婚女子の自由さを語つてゐるものであらうかと思はれます。Shirokogoroff氏によつて傳へられる Northern Tungus の男女關係には、既婚未婚に拘はらず、かなりな自由さが存在してゐます。衣飾では晋書によれば、猪(豚)の飼養が多く、其の衣を着、その肉を食ひ、毛を紡いで布を織るといふことが傳へられてゐます。辮髪は Tungus の間には、今もなほ残されたる風俗でありますが、挹婁には古く存在したことが傳へられてゐます。ただ其の形式は十分には分りません。斷片的ながら、これらを通じて一千數百年前の、此の滿洲住民の風俗慣習の一斑は察せられませう。

七

さて其の挹婁の後に、勿吉といふ名がそれに代つたことを、支那史籍は傳へます。これは南北朝對立の五、六世紀の交のことで、北朝の魏の歴史たる魏書に、此の勿吉の來貢の事、その他が記されてゐます。これによると、邑落各々長ありて相總一せ

ずとありますから、多くの部落の分立の事情が察せられるのです。此の部族の或る酋長―恐らく有力なる―から、五世紀末近くに、魏に使者が來、魏からも其の地に使者が赴きました。其の記事によつて當時の交通路が分りますが、勿吉の其の中心部落は、東流松花江南、拉林河域にあつたかと想はれます。そこから北流松花江を下り、嫩江を浜り、洮兒河に入り、洮南邊で上陸し、熱河の西邊を迂廻して―これは契丹の勢力を避けたのです―和龍即ち今の朝陽縣に出で、中原の北邊に達し、それから魏都洛陽に赴いたことが推測されます。

魏書には其の勿吉の使者の名を乙力支と傳へてゐますが、これは恐らく女真語の *ohcin* 滿洲語の *elci* などと同じ言葉の音譯で、使者といふ意味の語でせう。これはまた勿吉が、上は挹婁と關係をもち、さうして後の靺鞨に、その靺鞨はまた女真に、そのまた女真は滿洲族にと因縁づけられて、等しく Tungus の一系脈―たとひ親疎はあつても―に屬するものとされてゐる事實に、一つの助言をするものではありま

すまいか。

此の勿吉の名は、南北朝末になると、靺鞨といふ文字に代はり、北方の Tungus は、隋・

唐の時代は専ら此の名稱で、支那記録に現はれ、七部に分れてゐたと傳へられます。また七部の中でも、南方の粟末靺鞨—これは粟末水即ち北流松花江畔に占據したもの、北方の黑水靺鞨—黒水即ち黒龍江と東流松花江の合流地點邊を根據としたものが、最も顯著なるものと記されてゐます。

勿吉と靺鞨と文字面は異なりますが、勿吉(Wu-chi)の古音は Mat-kat 靺鞨(Mo-chieh)の古音は Mat-kat (hat)でありますから、何れも同一名の異譯であります。

八

かうした経過の間に、靺鞨七部の中でも、隋唐と交渉の多かつた粟末靺鞨は、其の地理的關係から、高句麗とも接觸を増したことが推せられます。それはまた多少なりとも、優等文化へのあこがれを増さしめたでせう。唐の高句麗經略に對して、高句麗は常に靺鞨族を、其の武力の一要素として利用してゐました。靺鞨七部中で南の白山部は、舊唐書靺鞨傳によれば、高句麗に服屬してゐたから、此の助力をしたものは、白山部であらうとはすぐ思ひおこされます。またそれは確に事實でせ

う。然し唐書が誇張はありませうが、巨萬といふ表はし方で傳へてゐる靺鞨軍は、これのみではなかつたらう、其の地理的自然から導かれて、粟末靺鞨のことが考へられます。

それはとにかく滿洲に於ける民族の發展の上で、是非いはなければならぬことは、此の粟末靺鞨を中心として、渤海といふ國が興起したことです。渤海の始祖たる大祚榮を傳へるのに、舊唐書渤海傳は「高麗の別種」といひ、唐書には「高麗に附する者、姓は大氏」といつた形式から、大祚榮は純粹な高句麗人でないにしても、恐らく父祖以來高句麗に歸附して、其の教養の中に生長した靺鞨族の出身者ではなかつたらうかと推測されます。此の大祚榮が、唐の則天武后の治世中に、營州熱河省朝陽縣に起つた契丹族の叛に際し、其の地に移されて居た、高句麗遺民と共に東に走り、松花江上流域に據つて、靺鞨を母胎とした一國を建てて、其の國を震國といひました。之れが渤海國の創建です。震は易の卦で東方を意味します。時に西紀六九八年、日本では文武天皇の二年に當ります。其の後、唐の玄宗は使を遣はして、祚榮を慰諭し、之れに渤海郡王の爵名を賜はつたので、渤海を以て其の國を稱することゝな

りました。祚榮は高王と謚されましたが、之れが第一代で爾後十五代、二百餘年の命脈をつないで九二六年(我が醍醐天皇の延長四年、支那では五代の後唐の莊宗の天成元年)契丹の皇帝耶律阿保機に滅されました。

さて此の二百餘年間に、種々注意すべきことがあります。第二代の武王の時には年號を建て、仁安といひ、また我が國への朝貢をも致しました。建元のことは漢の武帝に始る古い歴史をもちますが、これはなか／＼興味ある問題で、支那文化の一特色といへます。が此の独自の年號が、時に中原主權者に對する獨立を意味することゝなつた反面には、中原の年號の使用が、その屬國たる表示となつたことでもあります。最も例は朝鮮半島の國家で、中原の年號を奉じて、それを用ゐてゐました。殊に李氏朝鮮の如きは、明に事へては明の、清に臣事しては清の年號を使用しました。たゞ明への思慕の熱烈なものがあつたため、時には清朝になつても、なほ崇禎後何年などいふ紀年をしてゐるものもありました。之れは朝鮮の明に對する、義理堅さを示す美德とも、考へられなくもありませんが、同時に獨立的氣魄の無いこと、表面と裏面とのうらはらな手管とも、考へられなくもありません。

餘談になりましたが、武王は其の仁安八年、我が聖武天皇の神龜四年、使を遣はして、我が國に朝貢の禮を執りました。其の國書は我が續日本紀に載せられてゐますが、中に「高麗の舊居を復し、扶餘の遺俗を有つ」といひ、親仁、援を結び、庶くば前經に叶ひて、使を通じ隣に聘すること、今日に始めんと願つて來たのです。此の使は神龜四年十二月西紀七二八年一月に入京し、五年正月には謁見を賜はり、遠來の勞を犒はれ、我が國からも送使を附して送還しました。かくて後その國の滅亡するまで約二百年、三十四回の入覲があり、我が國からも時に送使、遣渤海使を遣はされました。

この武王遣使の主旨は、何處にあつたらうかといへば、ちようど其の遣使の前年に、彼れは北の黒水靺鞨の事から、唐との不和の因を醸さうとすることゝなつたのです。またそこには朝鮮半島の新羅に對する策略もありましたらう。さうした複雑微妙な關係が、日本海を越えての日滿提携となつたと見られます。

さうして後五年、王の仁安十三年(唐の開元廿年)には、海賊を使嗾して山東半島を掠めさせました。之れに對して唐の玄宗は、武王を慰諭する詔書を送ると共に、新羅に出兵を命令してゐます。と面白いのは此の事件後さらに五年、我が朝臣の間

に、新羅征伐の意見が公にされたことです(實行には至りませんでした)。武王についで文王欽茂は、賣家と唐様で書く三代目ではなく、國都を上京龍泉府

に遷し、其の大興の年號の如く、國勢揚り且つ長く、五十七年の支配をして、領土の開展、制度文物の施設、見るべきものがあつたと想はれます。晩年には一時東京龍原府に遷りましたが、此の龍原府は日本への交通の要衝で、今の琿春の古土城の地に當ります。遷都は重要な國策が關係しますから、之れは我が國との交通上に意味を有つたものかと想はれます。次の王になつてまた上京龍泉府にかへり、爾後國亡まで首府として榮えました。其の遺址は今の吉林省寧安縣東京城で、同地には千年後の今日、なほ周邊一五キロメートルに餘る土城壁が遺存してゐます。

此の國は建國當初の首府だつた中京顯德府、それにいま申した上京龍泉府、東京龍原府と、南京南海府、西京鴨綠府の合せて五京以下十五府六十二州があり、「海東の盛國」と傳記されてゐます。其の領土は盛時には、大體、東は日本海に沿ひ、北はロシア領沿海州、黑龍江ウスリ江の合流點の邊から、南は朝鮮の咸鏡南道にも及び、西南は鴨綠江の下流域近くに達し、西は農安附近から奉天邊を含んでゐたと推定され

ます。それで、地方五千里、戸十餘萬、勝兵數萬とも、其の國勢が傳へられてゐます。

其の制度はすべて唐制により、三省六部に擬して名は異にするが、三省六司といふのがあつたことなど、同じく唐書の渤海傳の記事や、我が國に來た使節の官職名等で、推することが出來ます。使節の教養では、其の漢詩文の練達、佛教の教化なども窺はれます。宗教にはその民族固有のシャマン教の影響もあつたとは想はれますが、上流には、佛教の感化が強かつたやうです。私が大正十五年の此の國都龍泉府の遺址調査の際に親しく觀たところでは、都城の中央を貫く、朱雀大路ともいふべき大街の南門に近く、東方に今も土人の信仰あつき寺があつて、そこに千古の後に當時法燈の輝いたらう石燈籠が遺つてゐるのを見ました。また小さいものではありますが、鍍金佛や埴佛の出土したものを祀つてあつたことで、佛寺等の存在も確められました。之れらのことは、漢文化の長き支配に生きた高句麗人を、支配階級に有つた當然の結果で、従つて其の大正十五年の遺蹟踏査報告なる「渤海國都上京龍泉府の遺址に就いて」の中にも、いつておきましたやうに、唐文化のみでなく、その要素には高句麗系の加味のあつたことは確です。報告には薄弱ながら埴

瓦の文様について、一例を挙げたことがありました。

とにかく北滿の野に、唐文化の光を受けてツングース種の堆土の上に、根を下した高句麗系の植物が、渤海といふ花を開いたと見ればいいでせう。此の渤海に於いてツングース種の滿洲に於ける一大發展期―國家的體裁の仕上が出來たのであります。其の宮殿の如き碧瓦を以て葺き、その床は文様ある磚を以て敷きつめたあとなど、いづれも斷片的ながら、その地からの出土品が語つてゐまして、それがまた唐式であり、高句麗様の加味あるといふわけなのです。

此の國都の、従つて此の國の文化を、如實に證明する資料の發掘のために、私は兩三日中に北滿に向ひます。改めてお話しする機會もありませう。

九

渤海を滅した契丹の皇帝耶律阿保機は、渤海の故土を東丹國東契丹の意とし、長子突欲を東丹王に封じ、舊國都に據つて、其の支配をさせることゝしましたが、各地の動搖は止まず、それが王室内部の事情と相まつて、さきに遼の國都に居り、ついで遼陽

に遷つた東丹王は、遂に其の支配を棄て、中原に奔つてしまひました。かくて西邊等は、契丹の直接支配となりましたが、東北方は全く獨立的のものとなり、また古い部落的生活に立ち歸ります。さうして此の渤海故地に據つた獨立部落、また遼の支配を受けた西邊のものも、女眞の名で呼ばれますが、獨立部落は生女眞、歸屬部族は熟女眞と區別されました。

さて契丹族―これは蒙古種にツングース種の混じたものです―は、熱河北方を根據として、かく滿洲に手を伸し、朝鮮半島に及んでは、高麗を朝貢國としました。一方さらに支那中原に對しては、五代紛争の間に、兵を南に下して河南を脅し、やがて宋と事を構へて、北支那河北山西の北邊に多少の領土を獲得しました。

此の契丹族の文化的事業として注意すべきは、漢字に對して自己の文字を創作したこと、即ちいはゆる契丹文字がそれであり、これは北方民族の動向の上、一つの重要な時期を劃した事柄であつて、其の効果はとにかくとして、創意の點に於いて注目されなければなりません。全く漢字文化に生きた、北方民族の過去に對して、此の獨自の文字の創作は、其の文化の獨立性の主張であります―實際

に於いては、此の企は効果なくして、やはり漢字に壓倒され、其の文字の如きは、極めて限局されて使用され、やがては全く顧みられなくなつたらしいにしても、それは符牌に記された一二字、書史會要が傳へるたつた五字のほか、長い間その字の形態をも、人間には傳へられなくなつたといふことでも、推測ができません。

ところが最近になつて、奉天の舊湯佐榮(湯玉麟の子)邸に藏せられた、契丹帝后の哀冊には、此の文字で綴られたものゝあることが發見され、今や大きいセンセーションが、學界に捲き起されてゐます。哀冊といふのは、帝后の殯葬に當り、其の功德を讃揚し追慕、哀悼の意を綴つたもので、其の文は方石に刻まれて柩側に安置されるものです。さうした契丹帝后の哀冊が、熱河の北の遼の陵墓から發見され、それが湯玉麟の手に歸して、遙々奉天に運ばれたのが、かの滿洲事變後に、我が軍部に保管されました。最近の話では、滿洲國の國立博物館に、之れを保存することゝなるといふことです。

遼史によりますと、契丹文字には大字と小字の二種があり、大字は太祖の神冊五年(西紀九二〇年)正月に出來て、九月に頒行され、其の發明には、耶律突呂不、耶律魯不

古等の名が傳へられてゐます。小字は太祖の弟で、語學の天才だつた迭剌が、作つたものと記されてゐます。それは太祖の天贊三年(西紀九二四年)か四年の事です。其の文字の製作がどういふものであつたかは、よくは分りませんが、書史會要に陶宗儀は、漢字の隸書の半を増損して作つたと説明して、僅かに五字を傳へてゐます。之れが恐らく或は大字といふものであり、小字は音符文字であつたかと想はれます。今回發見されたものは、明に音符文字たる組成を示してゐると思はれますから、小字であらうかと推定できます。

一〇

此の契丹即ち遼の勢力は、十一世紀末に至つて衰へて來たところへ、ツングースの女真族が擡頭し、遂にそれが十二世紀初頭に、金帝國を建設しました。やがて南方中原の漢民族の宋と聯合して遼を滅し、その領土は吉林、奉天省、北鮮から熱河地方へと擴がるに至りました。なほ宋の弱いのを看破しては、遙々馬を中原に驅つて、河南省開封なる宋の國都汴京を屠り、二帝徽宗 欽宗を擄へて凱旋し、ついで和を講じ

て、黄河以南にまで其の版圖を擴大しました。此の國の始めの首府は會寧府と呼ばれ、今のハルビンの東南阿什河の南の白城の地です。後には今の北平に遷都して、滿洲に併せて中原北部を支配するに便しました。

金も契丹に倣つて、初は契丹文字を使用しましたが、新に自己の文字を新製して、漢字文化への一抗議をしようとした。之れも大字小字の二體がありました。大字は太祖の天輔三年(西紀一一一九年)完顔希尹をして製らせたもの、小字は其の大字が字畫あまりに繁瑣であるといふので、第三代の熙宗が天眷元年(西紀一一三八年)これを頒行したものです。從來世に知られてゐた女真字碑銘の中で、大字と考へられてゐたものは、支那陝西省長安にある天會十二年(西紀一一三四年)の大金皇弟都統經略郎君行記や、京城李王職博物館の所謂女真大字鏡の如きでありましたが、前述の契丹文字の新出で、其の再検討が要求され、大字の正體については、今後の研究が期待されてゐます。此の大字に對して、其の成立に於いて、小字は其の字劃の簡素といふ事が豫想されます。支那河南省開封の宴臺碑を始め、滿洲國では大金得勝陀頌の碑、楊樹林山や最近發見の半截山の磨崖碑、朝鮮の慶源で發見され

た碑や北青の刻石など、これに入れる事が出来ませう。此の女真文字を、金ではいふ／＼な政策によつて、使用普及を講じましたが、漢字の勢力には、とても敵はなかつたやうです。たゞ幸な事には小字と思はれる方は、金の滅亡(西紀一二三四年)後も、なほ或る地方の女真部落では使用してゐて、明の中期までは其の命脈が保たれました。それで明代官撰の華夷譯語の中には、女真語の語があり、其の單語や、女真の會長から、明廷へ上つた公文を集録したものがありません。それをドイツの東洋學者 Grube 氏が、其の編纂の體裁を改め、ローマ字で發音を示したり、ドイツ譯を附けたりして、一八九六年にライプツィヒで刊行しました。„Die Sprache und Schrift der Juchen“といふのがそれです。これほど纏つて女真語を傳へてゐるものは、他には見出されませんので、女真字の解讀には、缺く事のできない書物となつてゐます。

金代に於いて支那文化の上になほ注意することは、此の時期に交鈔即ち紙幣の發行流通をして、經濟の上に新しい事例を開いたことです。尤も交鈔は宋代の交子などに、ヒントは得てはありますが、その普及性を擴大したのは、功罪は何れであれ、特記していいことでせう。

金は存續約一世紀で、外蒙古に起つた蒙古種に滅されました。此の蒙古はついで國號を元といつて、滿洲から中原への大統一支配に成功しました。此の蒙古の衰頽に乗じて、漢民族の中原恢復が唱へられて、遂に明の興起を見ます。

一一

蒙古の盛時にはツングース種は、其の支配下に、依然部落生活を續けたものです。が、明代になると、この漢人主權者の滿洲經路が始められ、殊に成祖永樂帝は、遠く黒龍江下流域までも招撫して居ます。女真族の定期の朝貢も繰返され、其の上表には漢文と共に、古い女真文字のものも、併せ上られました。前に女真字の明代までの使用、その小字と推定されるものゝ字書の存在をいひましたが、それは明代に此の必要から作られたものであります。

明末になつて女真族の一部落が、其の酋長愛親覺羅努爾哈赤に率ゐられて起ち、遂に中原への宣戰となつて、明に代つて清朝を建てることゝなりました。かうしてツングース種は、滿洲から中原への大發展をし、吾人が「支那」といふ概念によつて、

考へ浮べるあの大版圖―實をいふと清朝の盛時には、現在よりもつと遙に廣大なものでありました―を、統合支配することゝなつたのであります。

一二

さて翻つてツングース種の動向を通觀して考へますと、肅慎は暫く措きまして、貊(穢貊)の漢民族との接觸、高句麗建國は重要な文化現象です。それから挹婁、ついで勿吉、靺鞨等の朝貢の形に於ける中原主權への交渉、さうして七世紀になると、中原文化模倣の意念から、靺鞨を母胎とする渤海國の建設に、漢式國家の滿洲に於ける出現を見たのは、注意すべきことであります。その滅後約二世紀で、十二世紀初めには、女真族は金帝國を創設し、やがて中原に侵入して、其の北半を領有するに至りました。更に降つて十七世紀になつては、女真族即ち滿洲族は清帝國の建設によつて、完全なる中原の支配に成功するといふ、發展の經過をとつたわけです。

清朝に於いてツングース種の政治的、軍事的活動が、其の頂點に達したといはれますが、また實は此のツングース種の主權者の保護の下に、漢文化のルネッサンス

さへも現出しました。それらの事は今は一切省きますが、此の清朝でもまた其の國字の創作に留意し、國初、蒙古文字によつて、滿洲文字を作りました。蒙古文字はなほ現在の蒙古人に使用されてる音符文字ですが、清字は之れに據つて、やはり音符文字として作製されました。國粹的見地から、此の新製文字は強制されましたが、効果は少く、國字の使用は單なる形式に墮し、清末には全く忘却されてしまひました。しかもそれは新製の文字だけでなく、固有の滿洲語そのものをも、滿洲人たる者がすつかり話せなくなつてしまふといふ結果になり、勝ちはしたけれど――」の嘆きを、此の滿洲族に於いて、吾人は痛感させられます。數少き文化程度の低かつた人種の、絶對多數の文化高き異民族への勝利は、たとひ武力的には花やかであつても、いろ／＼考へさせられる要素が存在します。

なほ滿洲人が支配の必要から、中原へと移つたあと、其の故土は發祥の神聖地として、漢人の移入を禁じた封禁の政策も、一時的のもので、神聖な故地は、却てやがて其の漢人に占有されてしまつたのであります。今日の滿洲の開拓は、かうした中原からの移住者に先驅されて、その住民の色分の大部分が、漢人となつてしまつた



のです。尤も其のめざましき移入は、それとは關係なく、遙か後代の日露戦後の、滿の平和境出現といふことも、重要な關係をもちますが、それは少しく問題外となりますから、省略しておきます。

ツングース種——滿洲に於ける重要な民族の過去の動きは、かくの如く、清朝に於いて其の最高峯を示しました。それは彼等の文化的な能力の一面を證したものでありませうが、一方現在ツングース種の部落として、かゝる文化圏からは、全く置き去りにされて、人種學者や民俗學者の一研究對象としての、小さい生活をしてゐる者が、松花江畔、黒龍江畔に點在してゐます。

なほ上來述べたツングース種の動きに於いて、其の最高峯を示したといつた清朝の支配者等が、其の新製の文字を使用しなくなつたのはとにか、其の國語までも忘却してしまつて、支那語の使用と化したといふことには、滿洲族の能力を考へさせるよりも、より重く且つより多く、中原漢民族の有つ、同化力といふものを考へることが、重要であります。さうしてそれは恐らく、將來の滿洲を考察する上にも、重大な參考となるものでありませう。(昭和八年六月二日城大滿蒙文化研究會發會式講演)

752
140

昭和十三年三月十五日印刷
昭和十三年三月二十日發行

古代滿洲の民族と文化

京城帝國大學滿蒙文化研究會

編輯兼 代表者 速水 滉

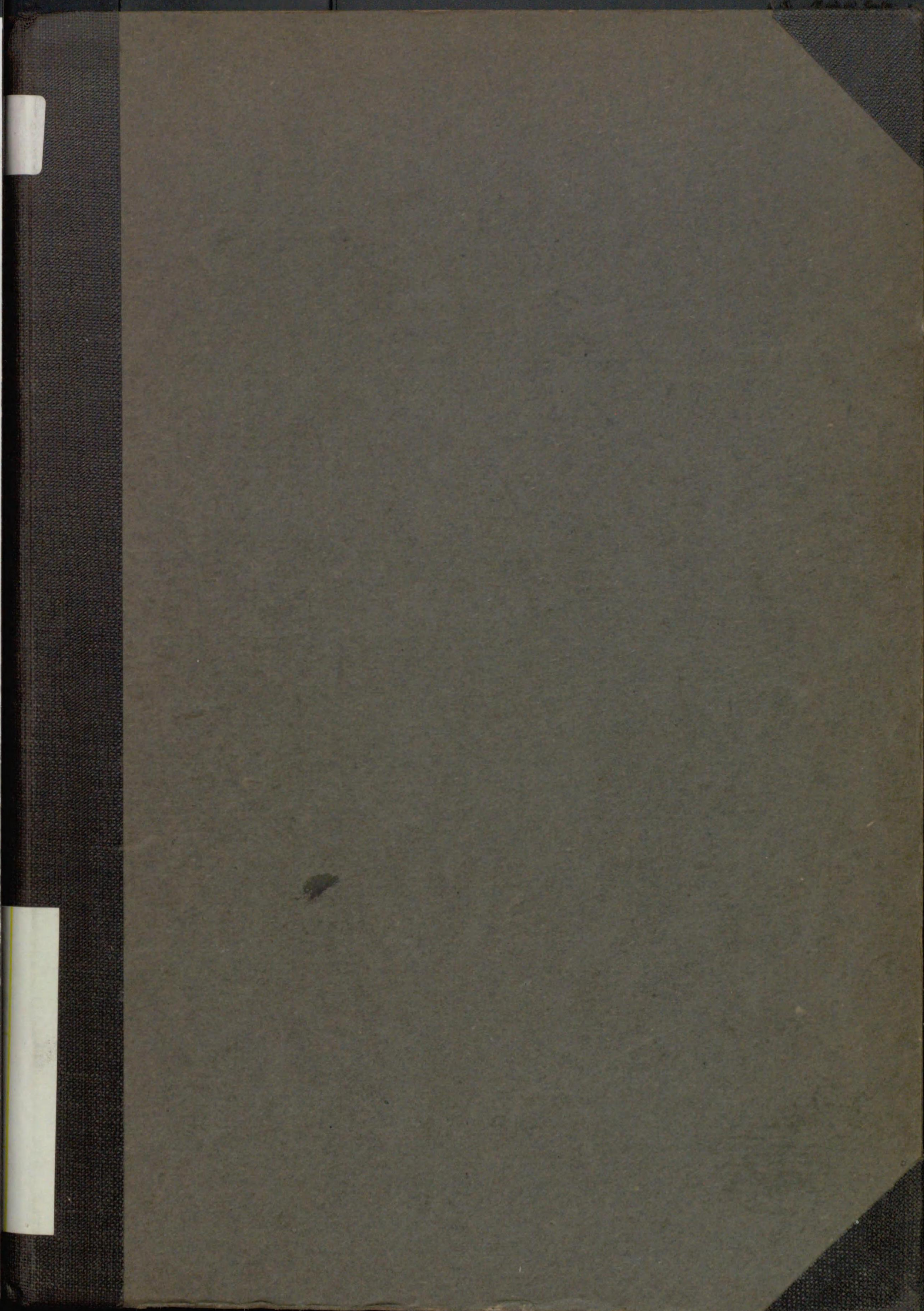
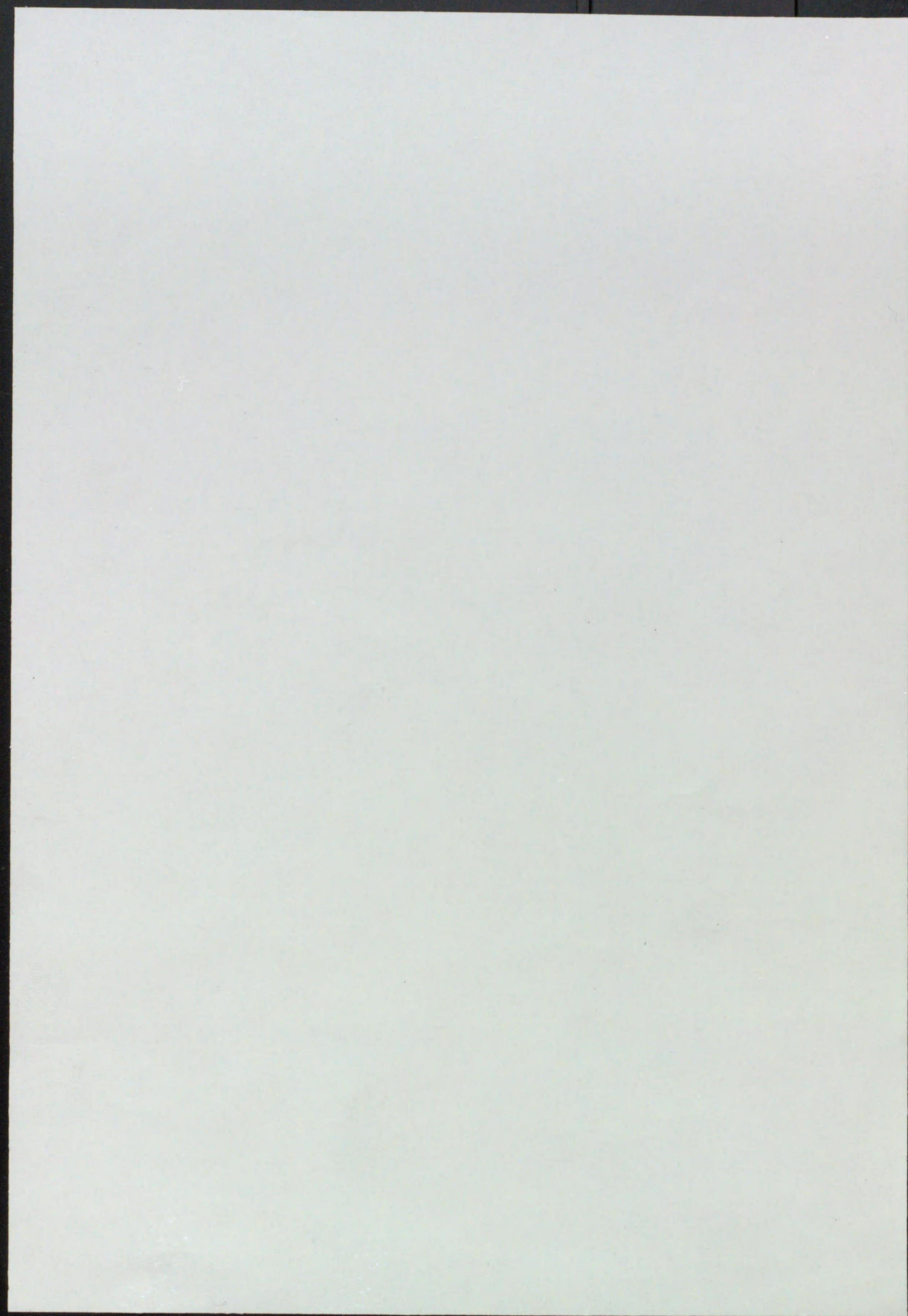
印刷者 高田 壬午 郎

印刷所 株式會社開明堂東京支店

發行所

京城帝國大學滿蒙文化研究會

752
140



Small white rectangular label or mark on the spine area.

Small white rectangular label or mark on the spine area.